Akutobhayā の譬喩表現に関する一考察

研究生　安井　光洋

『無畏論』は龍樹の主著である『中論』の注釈書であり、数ある『中論』注釈書群の中でも最古層のものと考えられている典籍である。しかし、その内容は様々な問題を孕んでおり、典籍自体の成立の経緯について詳細が未だ明らかになっていない。

その中でも最大の問題は、後代のいくつかの『中論』注釈書において『無畏論』という名が明記されることなく、その記述が引用されているという点である。それは特に鳩摩羅什による漢訳のみが現存する『青目註』と、『仏護註』において顕著である。とりわけ『青目註』については、内容があまりにも酷似しているため「本来は同一のテキストであった」という説もある。また、『仏護註』については第二十三章以降のテキストがほぼ完全に『無畏論』と一致しているという奇妙な関係性が存在する。

このように内容の類似が広く見受けられる三注釈書であるが、その一方で著しい相違が見られる箇所もある。それが「譬喩表現」である。『無畏論』においても様々なパターンで譬喩が用いられているが、それらの譬喩は『青目註』、『仏護註』ではほとんど引用されていないのである。よって本発表においては以上の点について、先行研究の見解も参照しつつ、具体的な用例をあげて考察を試みた。

先行研究の代表的な例としてはHuntington［1986］による「『無畏論』は発展的に成立した。そして、原初段階の『無畏論』には譬喩表現がまだ存在されていなかった。そのため、『無畏論』のテキストに譬喩表現が付加されたのは『青目註』および『仏護註』成立以後である。」という説がある。

しかしながら、実際に各テキストを確認すると、『無畏論』の譬喩が『仏護註』において引用されている例が確認されたほか、月称の『明句論』においても引用されている例や、それらを含むほとんどの注釈書に共通して引用されている例が見受けられた。

このことから、上述の先行研究で論じられているような「『無畏論』の譬喩は後代の付加である」という説は妥当ではないと考えられる。また、段階的成立という見解は極めて興味深いものではあるが、今回考察したような譬喩の問題も含めてプリミティヴな記述と、後代に付加された部分をどのように判別するのかという点で疑問が残るという結論に至った。